



令和6年度備中県民局「農福連携推進事業に係る先進事例の視察研修」として、株式会社八天堂ファームへの現地視察へ、備中県民局管内の福祉事業所の職員11名、農業者5名、関係機関4名と行政関係者14名が参加しました。

まず初めに八天堂ビレッジにて、株式会社八天堂ファームによる農福連携の取組についてのお話をいただき、その後八天堂ぶどう園で圃場の見学と農福連携の現状を伺いました。



## 開催の目的

備中県民局管内の農福関係者に対し、ノウフク・アワード受賞団体である株式会社八天堂ファームの先進的・積極的な取組事例に係る現地研修を実施することにより、関係者の農福連携への参入促進と、より高度な事業運営を実践できるようにするため



### 「農福連携事業開始のきっかけ」

まず初めに、福祉事業を中心に行っている社会福祉法人 宗越福祉会 理事 伊藤氏に現在の農福連携に繋がった経緯と現状を話していただきました。

平成 28 年に施行された生活困窮者自立支援制度をきっかけに、宗越福祉会は新たに就労訓練事業を始め、その後「農福」をキーワードに、生活困窮者の支援を目指す事業として「農福連携事業」をスタートさせました。

高齢者介護事業を中心に行う宗越福祉会は地域社会に対してどのように社会的貢献ができるかを模索する中で、「生活困窮者支援」を重要なテーマとして生活困窮者への支援に乗り出しました。



この活動の背景には、平成27年に報じられたシングルマザーの困窮状況に対する問題意識を皮切りに、宗越福祉会として生活困窮者支援が重要であると認識したことにあります。竹原市では生活困窮者が全国平均を上回っており、従来の福祉サービスでは支援が不十分だと感じました。また、宗越福祉会の高齢者介護施設で行っていた生活困窮者への就労支援では、収益や社会的な貢献度が少なく、持続可能ではなかったため、外部での活動の必要性を感じ、ぶどう栽培を通じた生活困窮者就労支援「農福連携事業」に着手しました。

竹原市からの紹介で令和3年4月、放棄されたぶどう農園の再生を宗越福祉会と八天堂ファーム 林氏が協力して開始し、生活困窮者の就労支援を目指しました。

当初4,000房から始まったぶどうの収穫は、現在15,000房になっておりさらに収量の増加が期待されています。

高齢者介護事業を行っていた宗越福祉会も八天堂ファームも、農業経験が全くない状態からのスタートでしたが、地域の方々の協力をいただきながら、少しずつ知識と技術を習得しました。

国の農研機構で定年退職を迎えたぶどう研究の専門家に指導していただくことで職員のスキルが向上し、訓練生への指導体制も強化していきました。それによりぶどう農園の管理や栽培の効率も向上していきました。

また収穫したぶどうの販売面では、八天堂などのプロの販売業者や加工業者との連携により、ぶどうの効率的な販売が実現しています。地域資源と専門家、行政の協力が功を奏し、宗越福祉会は就労訓練と地域貢献を両立する新たな仕組みを築き上げました。

## 社会との関わりと成長

順調にすすんでいた「農福連携事業」ですがメディアから注目をされることも多くなり、農場で働く訓練者が「生活困窮者」として取り上げられることに抵抗を感じる問題が生じました。これをきっかけに一時的に訓練を休止することもありましたが、新たな訓練者の加入での環境の変化や指導者のサポートで復帰することができました。さらに自分の育てたぶどうが害獣に食べられるなどの経験から、農作物との向き合い方への変化や活動意欲を高めるきっかけになりました。

このように訓練者が社会との関わりを広げることで、いろいろな課題も生じますが、活動を通じて自己の成長や自己肯定感の向上を感じることで、社会復帰や社会参加への一歩を踏み出す成果も見られています。

現在、就労訓練者の月収は8万円程度ですが、農業と福祉の両方の知識を学び「ケアファーマー」として将来月収が21万円程度になるように2~3年をかけ福祉サポーターとしての就労を支援しています。

また、現場経験を積んだ方が介護福祉士の受験資格を取得できるよう支援し、5年で自立できるような制度も整えています。就労を通じ知識と技術を磨くことで収入を安定させ、安心して生活ができる環境を整えていきます。

今後の話として、さらなる農福連携の推進として、令和6年度に竹原市のいちじく園を継承する予定もあります。その圃場は、ぶどう農園と同じく農研機構を退職した人をお招きする予定である他、ハウス栽培で地面をフラットにするなどして、車いすの方など幅広い方の作業が可能となるよう環境を整えていこうと画策しております。



## 「商品加工・販路における農福連携のあり方について」～商工農福連携～

次に株式会社八天堂ファーム 代表取締役 林氏による商品の加工や販売などを通じた6次化としての農福連携についてお話しいただきました。

農業や福祉のプロではない八天堂が農福連携事業に携わる意義として、やはり自社が得意な領域である商品開発、加工、販売力、販路を活かすというのが適切ではないかと考え、6次化を視野にいれた「商工農福連携」という考えに至り、八天堂ファームを立ち上げました。

害獣に侵されながらも初年度に収穫できた4,000房のぶどうを販売するため、すでに八天堂が確立していたパンや菓子の販路だけではなく、生鮮の販路をゼロから開拓していきました。



八天堂ファームのぶどうは、地産地消ということや「農福 JAS」を表示したことで、株主やマーケットから求められている ESG の取組として評価をいただき販売をすることができました。逆に一般消費者に対しては「農福 J A S」自体の価値の認知が低いこともわかりました。そこからは、ぶどうの品質のアップを徹底的に行っていました。

また、地元の特別支援学校の課外活動の一環で、共成活動のフィールドとしてぶどう農園を活用してもらい、ぶどう栽培の体験、収穫したぶどうで商品開発、商品の販売を行うなど、学びのフィールドとしての農福連携も行っています。

その他、農福連携だけでは消費者の目に留まりにくい現状を踏まえ、八天堂ぶどう園でのぶどうの生産販売やそれを用いた商品開発だけでなく、農福連携を行っている他県の農家が栽培したいちごを使った商品開発を行うなどのコラボレーションにより、高品質や高付加価値のある商品での販売数の向上とともに、日本全国の農福連携を向上させる取組を行っています。

それらの取組が評価され、国から「ノウフク・アワード 2022」において、「チャレンジ賞」を受賞するに至りました。

このようにさまざまな農福連携事業を行っていく中で、自分たちだけで活動を行うのではなく、広い範囲で農福連携事業者との共有をするための「コンソーシアム」が必要だと考えました。

## 「農福コンソーシアムひろしま」の起ち上げについて

次に伊藤氏から「農福コンソーシアムひろしま」の起ち上げについてお話しいただきました。



林氏と伊藤氏とのつながりで進めてきた生活困窮者支援のための農福連携事業ですが、今後のビジョンとして農福を基軸にした「農福コンソーシアムひろしま」の起ち上げに着手し始めました。

このコンソーシアムは、地域の農家や福祉事業者による農作物の生産、加工、民間企業による販路の確保など、それぞれが連携しネットワークをすることで構成されており、活力ある地域づくり等に対して助成を行うと共に、地域の農家、福祉事業者、民間企業が連携しながらコミュニティを充実・強化していくことで、地域社会の健全な発展と住民福祉の向上につながっていきます。

このコンソーシアムのネットワークを通じ、農福連携事業に携わる方を増やしていくことが生活困窮者の就労、農家の人手不足や荒廃農地の減少などの地域が抱える問題を解決していくことにつながるのではないかと考えています。

また、農福連携にとって商品開発や販路開拓はとても必要なことですが、それと同時に農福連携を多くの方に知っていただくためには「情報発信」を行うことが必要になります。

福祉事業者としてあまり得意ではない情報発信の取組に関しても、ネットワーク活用することで多くの情報発信を可能とし、結果、農福連携のアピールになりその価値を高めていくことができると考えます。

福祉事業所が就労支援の部分で関わることで生産、加工、販売を通じ農福連携の6次化が実現できる。さらに、労働者不足の解決や荒廃農地の抑制、働ける環境ができることで社会的孤立などを予防することもできます。

農福連携のアップデートを続けていくことで、社会的認知度を高め、農福で生まれた商品に新たな価値を生んでいきたい。社会を支える新たな仕組み化を進めていくために、これから農福コンソーシアムのネットワークを拡大していきたいと思います。

## 参加者からのコンソーシアム起ち上げへの質問



○コンソーシアムに広がりを持たしていく中で苦労した点は？

コンソーシアムを拡大する過程で、いくつかの困難に直面しました。構想には1年を要していますが、会費の面や資金調達が大きな課題となっており、商品の開発による売り上げの一部を事務局費に充てるなどの方法をとろうと考えています。

令和5年11月頃から少しずつビジョンは固まりつつありますが、行政間での協力には温度差がありました。東広島の行政が積極的だったことが助けになったと思います。

しかし、コンソーシアムのビジョンがまだまだ明確でないことで大手企業のサポートが得にくいこと、行政間をまたぐ助成や補助金の取得が難しいことがあり、資金に関してはまだまだ問題があります。また、認知度の低さや実例がないことが、助成金を得にくい要因となっています。

それを踏まえて、自分たちが目指すことはコンソーシアムを実装できる形のプラットフォームを作り、皆さんにしっかり参加してもらえようしたいと思います。

続いて、八天堂ぶどう園へ移動し圃場の見学をさせていただきました。

圃場内については、管理や作業者の指導をされている、株式会社八天堂ファーム 特別顧問の弓場氏にご案内いただきました。

なお、弓場氏は先述した農研機構を定年退職後に招かれた専門家で、30年ぶどう栽培に携わってきた実績のある方です。



令和3年から管理を始めたぶどう農園は、1年以上放置されていたため、木々が傷んでおり、後継者もない状況でした。再生が困難な木は切断するなどし、なんとか圃場の再生に成功しました。農園の面積は約80アールで、現在150本のぶどうの木があります。栽培している品種は、シャインマスカット65本を含む12品種でピオーネ、藤稔、新品種のクイーンニーナなど12品種を育てています。

害獣対策としてワイヤーメッシュの柵を設置し鹿、イノシシ、アナグマなどを防いでいます。また、上空にテグスを設置することでカラスを侵入も防いでいます。

特に1年目、ぶどうの被害が起きた際、鹿の被害だと思っていましたが、設置したカメラにより、実際の被害の原因がイノシシであることが判明し、ワイヤーメッシュの柵へ交換する対策をしました。

それからは順調に収量を増やすこともでき、今年は新品種「グロースクローネ」の初収穫を行うこともできます。

グロースクローネは黒系のぶどうで、1粒が約20g、1房に25粒の実がつくぶどうです。この品種は木が安定するまでに約10年かかるため、ぶどう農家が手を出しにくい品種です。将来このぶどうの生産を成功させ、新しい販路を作ることも考えています。

これからさらに、より質の高いぶどうを作っていきたいと思います、と語りました。





## 今回参加した農家や就労支援事業所の方からの質問と答え

この圃場で働く方たちの勤務について

○働いている方たちの住まいは？

：竹原市に住居のあるかたで比較的近いところから通っています。

○通勤方法は？

：直接圃場まで来られるか、宗越福社会の拠点に出勤し、職員と一緒に圃場へいきます。  
また圃場に向かう途中で乗り合わせる方もいます。

○勤務日数や時間は？

：週2～3日 9：15～16：15（間に休憩あり）

○作業内容は？

：特に障害認定を受けている方たちではない（生活困窮者）のですが、色々な方がいます  
ので、個人個人を見て職員と相談して、それぞれに合わせた作業をしてもらっている。

○休憩場所は？トイレはどうしている？

：休憩場所は特に用意してないので、木陰に野外用の椅子を設置し休憩している。

トイレに関しては、特に女性が圃場に設置している簡易トイレを好んで使用しません。

なので、麓の旧小学校のグラウンドに設置されている地域のトイレを利用させてもらっており、職員が定期的に連れて行く。

宗越福社会としては、今後障がいを持つ方たちの受け入れも考えているので、車いすのような身体障害の方も働けるような環境を作っていきたい。

○現在「訓練」として働いている方たちの就労について

：どのタイミングかなどはまだ定まっていませんが、将来的にはこの圃場の職員として就職という形で働いてもらえるようにしたい。



## まとめ

今回の見学会を終えて、農福連携というものが「障がいを持つ方の働く場の提供」や「農家における人手不足の解消」だけを目的にするのではなく、農作物の生産、商品の加工、販路拡大を大きなネットワークの中で同時に行っていくことで、農福連携による生産物の価値を高めるとともに、新たな雇用促進や人手不足の解消を進められ、関わる人たちの社会的貢献や自己肯定感の向上につながるのだと思いました。

また、福祉事務所、生活困窮者・障害者、農家だけでなく、民間企業、地域の住民や行政など様々な立場の人々が協力し合っていくことにより、農福連携事業が今後の社会を支える新たな仕組みづくりになるのだと思います。